

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	雑報
Author(s)	
Citation	龍南會雜誌, 14: 39-46
Issue date	1893-02-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4024">http://hdl.handle.net/2298/4024</a>
Right	

霞立つ春日のどかにかし原の宮に御代をはしろしめしけむ

同

同 下村

光

万代もうこうぬ國のみはしらを立てましゝ日を祝ふりふかな

曉 梅

同 同

はるさめのはきてしつけき曉にゆやのひまもるよどの梅か香  
有明の月の光もかすかにてをほろににはふ軒の梅か香

蒙古襲來

同 吉田

豊

いさつしまさふりし仇もなにくせむ筑紫の海のもくつとそなる

同

同 下村

光

神風にしつみし仇の澤なまは千ひろのうみもあせやしにむ

## 雑 報

### ○春色動

年改て煙暗澹雨蒙茸、吾人は寒齋春色の沈々として來る遲きを歎じたりき、然れども太昊已に規を執り歌君連りに律を吹く、北帝如何に貪婪剛愎なると雖是に至てそれ避易の情なからんや、東風細かにして流漾々、蘇岳は半之殘雪の冠を脱して、龍山全く陰雲の封を排り、梅芳方に薰して淡々たる輕煙に染み、柳眼漸く新にして雍々たる靄色を帶ふ、綿蠻たる黃鳥は彼の丘に啼き、躍如たる胡蝶亦た將さに此野を舞はんとす、春色是に於てか動きぬ、試みに吟歩を郊外に轉せんか、煦々たる風光汝が眼を照らさん、欣々たる萬象汝が心に映せん、鬱腦散じ

盡して心神を暢然たるや必せり、方に是を之を觀て害なく、之を樂んで益ある候なるか、快と曰はざるを得んや、若しそれ艶陽春漲るの二三月、夭桃嬌李落花狼藉群鳥亂舞の節に至ては、所謂春眠曉を覺へずして惰性醸し易し、放情顛狂制するなくんば、歡樂極て哀情必ず生せん、一年の大計此時已に泡沫に附去らんとす、嗚呼今の時のみ必竟天賜の好時節！

### ○紀元節

例の如く整服着用の午前九時半本館前庭に整列し順次本館の一室に入りて聖影を奉拜し列を整へて雨天体操場に入り皇祖遙拜の式をなし秋月教授は勅語を奉讀し終て一齊に國歌を唱し其より食堂に入りて金響を酌み帝國萬歲寶祚萬歲を祝し併せて本校の萬歲を唱へ萬歲萬々歳の聲は方に龍麓白濁に震ふ時午砲一響百八發の祝砲は遙かに山崎練兵場に起れり

○撮影 去三日柔道部員百數十名は本校に於て、本校全体の職員生徒四百餘名は錦山神社に於て嘉納前校長と共に撮影せり思ふに先生は去て東都に在りて雖ども其神魂は常に吾人の上にあらん而て其風采の如きは長く此眞影の中にあり然らば則ち吾人は常に先生の神魂と風采とに接す唯旦夕先生訓誨の言を耳にするを得ざるを憾むのみ

### ○送別會

天何ぞ我校に幸せざる剛毅なる野村校長は去て西海の濱に耕し温厚なる平山校長は已に吾人を捨て、神籍に上り明快なる嘉納校長は今や羅せられて闕下に到ふんとす既往は追ふべからざるか成事は説くべからざるか。然れども吾人は空しく天の我に幸せざるを啣つてと能くざるあり吾人は恬として之を雲烟遇眼視すること能はざる也先生去ると雖も果斷なる中川校長を得、理は於て欠くるなしと雖も情に於て憾む所あるなり春去り夏來るは固より宜しく然るべき所ありと雖も春未だ中ならずして夏は既に來らば吾人は胸裡に介然たるなきを得ざるなり直截に云へば吾人は長く嘉納先生をして本校の校長たらしめんことを欲せなむ。天日復び回すべからざるか頑石は射て穿つべからざるか先生留任の事果して成るべきか果して成るべからざるか然らば則ち吾人は先生の東行を送るべきか將た送るべからざるう送るべきう事或

と成らん送るべうらざるか事或は成らざらん吾人は實に大に迷へり。既に四日となりぬ明くせば五日なり文部省參事官なる嘉納先生は既に此地の人にあらす乃ち匆卒意を決し四日の夜を以て先生を瑞邦館に送れり。此夜恰かも先生は縣官及陸軍將校より招かれて送別の宴に至りたれば八時ならでは臨席されざるに已に六時頃より續々來り會するもの四百餘名に及所謂立錫の地なきに至れり乃ち本田舍監は師範校の行列横截事件に就き林市藏氏は嘉納校長留任請願の顛末に就て委細に述べ終る時已に八時を過ぎぬ送る人悉く集まれども送らるゝ人未だ來らず乃ち本田舍監は再び起て氏が旅行に就き面白き演説あり演説已に終まり而も先生は未だ來らず乃ち當日の餘興として招き置きある例の琵琶法師をして一曲を奏せしむ曲終る先生未だ來らず乃ち又一曲を奏せしむ曲終る頃先生漸く來れり乃ち先生に一席の演説を乞ふ先生之起てり歡呼の裡に起てり先生は説き來る様

余は實に忍びず余は實に苦しむ余は諸君を捨つるに忍びず余は本校を去るを苦しむ實に忍びず實に苦しむ抑も始めて余は任に此地に來るや余が計畫しつゝある國家的の事業は或は長く余をして此地に留まらしめざらんを慮れり已に來りて毎日諸君と接し又時に當地の人に會し其風を視其俗を察し吾と能く九州人を知るを得たり九州なる哉九州なる哉余は九州を愛せり余は實に九州人を愛せり乃ち余は永遠に此地の人たらんことを期するに至れり思はざりき文部省内の都合は遂に余を羅して本校を去らしむるに至ふんども余は大に躊躇せり余は實に其命を受くるに苦しめり乃ち余は在官のまゝ之を兼任せんことを申出せり然れども終に許容されざりき許されざる固より其所なり退て思へば一校の校長たるべき大任をば片手仕事に爲し得べきの理やはある

余は實に忍びず余は實に苦しむ余は諸君を捨つるに忍びず余は本校を去るを苦しむ然れども余の將來に爲す所已に吾全國ふあれば間接には亦本校の事に關す而して九州人の特性は

固より國家的の事業を好むにあまは是れ亦余の希望に一致するを得べし加ふるに不肖去ると雖も後任の校長は誠に其任に適するの人なれば東西相應じて以て將來を處置せば本校の校運は益々進捗するを得ん且本校には已に龍南會なるものもあれば余と其會員として永遠に縁を本校に有するを得ん若し卒業生諸君の多く東都に集まるに至らば龍南會の支部を東都に設くるも可ならん彼是百方焦思熟慮其忍びざる所を堪へ其苦しむ所を慰め斷然此に諸君と袂を別つに至れり已に袖を別つ豈一言の與ふるなきを得んや

諸君は當時吾國の情態を以て如何なる點にあまとするか洋行者は能く之を知らん西洋よりては日本人を以て奇異の一人種視し環瞻回視人をして殘念に勝へざらまむ特に中等社會にありても未だ全く日本なるものを知らざるもの多し豈慨嘆せざるべけんや余嘗て洋行の歸航中太く遅しき魯西亞人を擲たることあり是れ一小事なり思はざりき忽ち四海に喧傳し到る處余は糾すに此事を以てするに至らんとは余は此を見えて實に慨嘆は勝へざるなり何う故に然るか今茲に邦人が朝鮮人を投げたりとせよ斯の如くに喧傳するに至るべきか蓋し朝鮮人と邦人よりも劣弱なるを知ればなり今や我日本人は自ら魯人よりも劣弱なりとは思はざるか若く思へばこそ此の如くに喧傳するに至りたるなれ余が慨嘆に勝へざるは實に此が爲めなり今や日本の一士官西比利亞を横ざりて歸るものあり日本人は此を以て大豪傑の如くに喧傳せり又日本の一醫士獨乙にありて少く發見を爲またりしに日本人は直に此を以て大學者の如くに喧傳せり西洋にては絶へて此の如き士官此の如き醫士を出さざるか蓋し十を以て數ふべきのみ此二人は固より我社會にありては少しく秀拔なるものなるべしと雖も斯の如き人を以て我國の大豪傑となし我國の大學者とすを見まば本邦人現今の程度の甚とだ低下なるを慨嘆せざるべからざるなり

諸子よ今の世態は此の如くなるぞ諸子と安閑として眠るべきの時にはあらざるぞ恬とえて

優遊すべきの時にはあらざるを熟考せよ如何んぞ勉めずして居らるべきや如何んぞ勵ま  
して居らるべきや勉めずんば吾帝國を如何せん勵まずんば吾國家を如何せん（是に於て先  
生は鐵拳を以て演壇を打つこと三たび）吾又多く言はず男兒は當に勉むべきのみ勗めよや  
勗めよや（氣焰万丈聲會堂を動かす）

先生は氣を勵して語をぞ吾人豈感激せざらんや先生は泣て語れり吾人豈感泣せざらんや拍手喝  
采暫時らく已まざりし此に於て林市藏氏之起て總代として答辭を陳べ其れより先生より與へら  
れたり饅頭及菓子を配り餘興として例の琵琶法師再び壇上に現はれて特意の技を始めたり十二  
時に至りて之を止め其れより清樽を開き大盃を採て先生の別を送り併せて先生の健康を祝せり  
先生も亦快く數盃を傾けらるを我校の万歳と吾人の健康を祝せらる人散り場靜なるに至れるとき  
漏刻已ふ二點を報せり

○無限の恨 去五日雨は濛々として下れり先生の車は官宅を出で、停車場に向へり瀛車  
は來れり先生之之に入れり瀛車は動けり吾人が親愛なる恩人を載せて走れり五百の送人は先生  
の爲めに陽關の曲を謠へり先生は車窓より帽を振て之に禮せり瀛車は次第に遠くなれり鐵路一  
曲影は終に空し、黒烟一抹、此恨終に朽ちず

○有終會 豫科一級生徒と秋月教授とになれるもの其目的は倫理を講明し修身を實行する  
にあり吾人は我校の始めて純粹に倫理修身を目的とせる一組織を得たるを祝す

○進講 秋月内田の兩教授は師團長宮殿下の爲に論語孫子を進講すべきを依頼されたり。  
因に云ふ殿下は大に學業に精勵し給ひ進講の當日には御不例を省みず終始危坐えて御聽講遊ば  
さるゝと云ふ

○大に之を祝せよ 齡既ふ古稀に達す猶鑠鑠とて國家の爲めに育英の業に従事せらる  
ゝものは我教授秋月翁あり翁は自から敗餘の卒と云ふ翁は兵戰の爲めに敗れたり翁は實に會津

一番の爲めに戦ふて敗れたり翁は實に幕府の爲めに戦ふて敗れたり然れども翁は固より忠を事ふる所に盡すの人なり今や翁は其德器を以て其學業を以て我大日本帝國の爲めに不徳なる流行と戦へし輕薄なる風俗と戦へり船戰の藝術の吾國体に悖るの點と戦へり而て其戰は正に勝てり吾人は一に翁によりて母校の重きを存す而して翁は今古稀に達せり乃ち翁の肖像を瑞邦館上に掲げ翁の爲めに盛大なる祝賀の式を舉げんとす、祝すべし大に之を祝すべし之を祝せずんば將た何に向てか祝せん第五高等中學と云へば秋月翁は直ちに之に伴ふものを

○猛省せよ 已に稱して人間と曰ふ、則ち自ら禽獸と等かるへからず、而も尙ほ三枝を讓る能はずして反て禽獸の笑を受けるものあり、吾人今此輩を驚々するの要なし、獨り朝も道を聽き夕に徳を磨くべき學生にして暴慢の風に向ひ謙讓の美を失ふあらしめば、吾人は鼓を鳴らし之を攻るも躊躇せざるべし、吾人は我校の或部分に於て秩序紊れ長幼序なく上下禮なきの傾きあるを聞たり、然れども吾人は初め之を疑ひたりき、少くとも思へり、此輩と雖も時期と場合に應じては固より勘弁顧慮の念あるべしと、而れども哀むべし、事實は吾人をして一種の空想者たるに過ぎざらしめたり、事實何の時にう認め得たる、嗚呼吾人豈之を暴露するを喜ぶものならんや、而れども斷じて曰はん、實に去る十一月吾人日本帝國臣民の最敬虔恭肅の微衷を表すべき我皇祖肇國の一大紀念の節に於て此事實を見たりき、即ち彼等は遙拜式場に於て、嘯けり、騒けり、甚きは列を亂して板壁を攀ちるものありし是或は彼等の無邪氣に出でしとらん、然れども已に神聖なる式場を汚せしもの素より無邪氣を以て恕すべからざるなり、之を要するに、平素の狂慢疎放知らず知らずして此一大不敬を醸さしめたるものと斷言せざるを得ず、吾人今之を追ふも益なし、自今猛省一番、扉戸を綯繆し、將來復た這般の事あからんことを誓はんとす、意切にきて言激す、亦た我校と我國家を愛するの餘に出るのみ、

# ○臨時土曜會

去月廿八日(午後六時)臨時土曜會を開けり會員廣田直三郎君兵式体操に

就て、同高橋那次郎君愛校心に就て、各自熱心に意見を陳述せらるたり、次に滞熊中なる福島縣教育篤志者長澤則彦君幻燈を携へ來り、大に愛國心と普通教育の關係、及び獨力之が振興を計るに決心、終に教育幻燈を携へて全國漫遊の途に就くしめたる所以なるを述べらるたり、論旨例証高尙ならずと雖而も適切真摯、人の肺腑に入り感動を與る點なからざりし、次に胡元襲來の幻燈を示さる、關係深き九州人の事なれば其感動例ふべからず、切齒扼腕怒髮血淚、滿堂蕭殺として腥風四來し、殆んど當時に在るの情を呈したりき、其他尙教育上有益の幻燈數多ありしも、漏刻已に十一を告ぐるにより割愛して散會せり、當日の來會者は櫻井秋月大瀨大幸れ諸教授を始めとして無慮三百餘名なりし、

○一現象　曰く豐錦會支部曰く南筑俱樂部曰く筑前俱樂部曰く積田俱樂部曰く鹿兒嶋俱樂部(成立の順序に依る)郷に依りて會するもの近日頻りに起る來る其流行を笑ふものあり其簇立を怪しむものあり其封建の餘弊なるを疑ふものあり其分立を來さんことを憂ふるものあり笑ふものと笑へ怪しむものは怪しめ疑ふものは疑へ憂ふるものは憂へよ吾人は當に親しむべきに親しむべきを知る吾人は愛郷心の甚だ大切なるを知る吾人は切磋琢磨の唯親友の間に行はるべきを知る吾人は近きよりして遠きに及ぼすべきを知る是を以て吾人は決して笑はざるなり吾人は決して憂はざるなり吾人は決して怪しまざるなり吾人は決して疑はざるなり然れども若し其心意の果して流行に出で封建の餘弊に基き其結果の將に各藩分立に至らんとするに至らば其斡旋者は當に之を解散すべきの義務を有す我校の當局者は當に直ちに之を禁止すべきの權利を有す兎に角是れ近日我校に於ける一現象なるに相違なきなり

○寄贈　校友會雜誌(一中校友會)壬辰會雜誌(三中壬辰會)學友會雜誌(造士館學友會)國教(國教雜誌社)九州文學(英學校九州文學社)少年文庫(少年園)錦溪(九州學院文學部)及福井彦次郎先生より自著高知土産を各々本會に寄贈せらる好意厚く之を謝す



○客員 前號掲載漏の分左の如し

在帝國大學 原 勇六 同 松尾 正治 同 川口 虎雄

同 不破 熊雄 同 三根 正亮

○退會 本會客員今井與市君と今般退會せられたり

◎會 告

自今本會員にして月謝を拂はざるもの(客員、特待生の類)の本會々費は總務委員領收す